

おもてなしの心を一碗に

常磐大学高等学校3年（茨城県）

横田 采和

今年の7月に開催された文化祭でのお点前を最後に茶道部を引退した。高校に入学して新しいことに挑戦したいという思いから、部活動紹介で惹かれた茶道部に入部した。中学の頃、私は運動部に所属していたが、コロナの影響で大会が中止され、何も結果を残すことが出来ず引退し、どこか心残りがあった。

高校に入学してからもコロナの影響は続き、他校の茶道部との交流会も中止され、何を目標に茶道と向き合えばいいのか分からなくなった時期もあった。今年になってコロナによる規制も緩和され、少しずつ色々な会が開催されるようになった。

2月には、水戸の梅まつりで行われた野点茶会に参加した。梅まつりは日本三大庭園の一つである偕楽園で行われた。そこでは、人が点ててくれたお茶をいただいた。部員以外が点てたお茶を飲むのも、部員以外がお茶を点てる姿を直に見るのも初めてで、食い入るように見てしまった。部活動ではない中で、作法を間違えないようにと緊張していたが、お茶を飲み終えた後、優しい気持ちになり、穏やかな時間だったと思えた。それは偕楽園で色づき開花した梅の花を見ながらお茶をいただいたことも関係していたのだと思う。私は、気分転換に映画を観たり、友人とカラオケに行ったりするが、映像や機器を使用せず、自然の中で開催された茶会は気持ちをリフレッシュする良い機会になった。現代のように機器がなく、娯楽の少ない昔の人にとって、偕楽園は自然の中で気持ちを落ち着かせる良い場所だったのではないかと、またその中で飲むお茶は心を和ませたのではないかと思った。

6月には、学校近くにある保和苑で、あじさいまつりが開催され、そこで私たち茶道部が亭主としてお客様にお茶を点てた。初めて家族にお茶を点てている姿を見せることが出来た。沢山のお客様の前で、お茶を点てる緊張感は想像以上で、お客様を和ますどころか私の緊張感が伝わってしまうのではないかと思った。自分が梅まつりの時にお点前を凝視してしまったことが無意識に相手に緊張感を与えてしまったのではないかという考えが頭に浮かんだ。二度目のお点前では緊張もほぐれ、手順のミスなく、お茶を点てることができた。無事に終えたことでほっとしたと同時に達成感があった。

7月の文化祭、私にとってはこれが高校生活最後、茶道部での集大成だ。同級生、後輩、そして顧問の先生と最後の茶会。来てくれたお客様は同じ学校の生徒やそのご家族、学校の先生方だった。あじさいまつりでは作法を間違えないようにと緊張していたが、文化祭では、緊張よりも、感謝の気持ちをこめておもてなしをしたい、来てくれたお客様全員にお茶を楽しんでもらいたい気持ちのほうが強かった。文化祭では毎年浴衣を着て参加する。3年目の浴衣は着付けも慣れたものだった。私も先輩みたいになれたかな、少しは追いつくことが出来たかなと思えた。浴衣は、戦闘服のようなもので、浴衣に着替えると気持ちも引き締まった。私が点て

たお茶を飲んだ先生にお礼を言われた時はとても嬉しかった。茶道部の活動や生徒会活動、両立し続けてきて本当に良かったと思えた瞬間だった。

中学時代の部活動の経験から、結果や順位が出ないことで何を目標に茶道をしているのか思い悩むこともあった。そもそも茶道は勝負事ではないのだから勝ち負けの勝敗がつくわけがない。でも、私は、順位という結果を求めてしまっていたのだと思う。それでも茶道は私の気持ちを落ち着かせてくれた。お茶を点てている時、割稽古中は余計な事を考えず、無心で茶道と向き合うことができた。今は、茶道を通じて自分を見つめることができ、自分自身、成長できた。私の高校生活での新しい挑戦の一つ、茶道部へ入部し、茶道と出会えて良かったと思う。